

增補  
須書

訓蒙圖彙大成  
十

~~P  
279  
10~~

道遙文庫  
文庫6  
27  
10



喜

頭書增補訓蒙圖彙卷之廿一

雜類

此部に諸天神仏聖賢佛菩薩諸組師  
 其外人物の部小濟るは補ひたる也

書

○右と右彌金剛と云  
 人の生善は云ふ  
 才の入那羅延金剛  
 ともいふ

○たはた輔金剛と  
 つ人の断悪と云ふ  
 あびつ年入密迹金  
 剛ともいふ佛法の守  
 護神なきは三門  
 安置と

右彌金剛

左輔金剛





持國天王 乾達婆  
毗舍闍 是下 踏  
て東方と守護を  
ふ四天王乃第一なり  
○增長天王 鳩槃荼  
薛荔多を是下に踏  
後南方と守護を  
は四天王の第二なり  
○廣目天王 龍及び富  
單那と是下に踏を  
少法界と安立一勇  
を守護を  
○毘沙門天王 夜叉羅  
刹と是下に踏を  
北方と守護を  
悲多聞天王ともいふ

○韋駄天の佛法の守  
護神 多魔王佛舎  
利と奪と外と退火  
返と入り 禪家の  
尉ふ安直と  
○鐘馗 唐の明皇夢  
に 後南の進士鐘馗  
と天下の虚耗妖孽を  
と厭ふと人なよ  
兵道に命して其形と  
脚すの天下に作すと云



新  
鐘馗

新  
韋駄天



毘沙門  
天王

持國  
天王

新書地持神部家圖卷六



辨才天女

○衆生に智恵福

をわく人をあふたり  
琵琶と彈したまふ相  
とありく又を妙香

天女ともいふ

福祿壽

○福神たり天童星

この星乃化現多り  
顔かぐして授はる  
髪は結とてしる  
務を筆と又麻呂  
をともいふ

辨才天女



福祿壽



大黒天

○八万四千の眷属  
あり貧困と轉して  
福者とかさんと言  
たまふ摩伽羅神と  
もいふなり

蛭子

○伊弉諾尊は牙三

の所子日の神の所  
牙西宮蛭子三所殿  
とつゝあり市乃賣  
買と守りぬ所神  
か

蛭子





布袋

○支那の散聖ありて弥勒菩薩化身なりと云ふ常は布の袋に負くのを以て布袋と名づく

寿老人

○福神あり老人を以て呼ばれ現方を白髪ありて帽子をかぶり杖をもちて歩む

布袋

寿老



伏羲氏唐土の帝王

大聖なり此を金始て網罟と作て捕魚を民小教あり又畫八卦を張りて造たり

神農氏

○神農氏は同帝にして聖人なり民に五穀を教ふ事伝教又市をなす交易の利を授けんとす帝草木の味を嘗み平熱の性を知る病と瘵を知る事と教ふ此より醫道あり

新神農

新伏羲





○倉頡の黄帝代の人あり眼四のあり鳥乃是跡孤ふくく造て文字と作り是文字の祖なり

○黄帝の軒轅氏とて此時より曆算律呂宮室書契冠服等とづく具ち又始て舟と作り元妃と命とて替業と教め入



○孔子の唐去周代の人堯舜の道弘め五常と教め文宣王とて儒家の大聖人なり

○老子の周の代堯室の史とて養生を教む

○許由の堯帝位と讓らんとのゆゑを聞て其耳汚せりとて潁川の滝つろり耳と洗し賢人なり





○維摩居士ともいふに  
 子に拂子仮持方丈  
 の凡ふ八方の師子ね  
 とのり三ふれ大衆を  
 入と法門とし多  
 ○山越の弥陀の比叡  
 横川の峯河弥陀佛  
 のま容は現し多  
 惠心僧都ねまひて  
 寫しゆひりて  
 ○聖徳太子の仁王三  
 用明天皇の皇子かり  
 世に代推古天皇は所宇  
 括政らる日本佛法乃  
 祖あり守をとて括  
 天皇寺と建をま



○出山の釋迦の如來  
 十七歳少て出家  
 三十歳の沛時十二月八  
 日明星の出りて麻  
 然大悟とあり正覺  
 を成るなり  
 ○誕生佛の釋迦如來  
 卯月八日寅の起る誕  
 生しあひ七歩の  
 沛も乃た右左の  
 上天下唯我獨尊と  
 のをありと入滅と  
 二月十五日から



真書會用川卷下



○初祖達磨の梁乃武帝にまゝに臥し、魏の少林寺に入つて世ふ草庵に達磨とも二一草乃を磨ともいふ

○不動明王の如く利劔と持たし撐の繩と持たし衆生の乃を惡をいすめめ人をとてを屠し後の世の勤せぬものも又人の怨をいすわに示しめ人をとて

○龍猛菩薩の南天竺に出生釈尊より八百の後あり真言宗の祖なり大日経合則頂禮積念地經弘めあり  
○善導大師の唐去長安の游より出現志あり三十余年少も睡眠せど唐永隆二年三月十四日遷化  
○天台大師の陳隋二代の國師唐主天台宗の祖十一月廿四日六十歳にて入滅智者大師ともいふ



不動明王

達磨尊



龍猛

善導大師

天台大師



○六祖大師の唐土より  
達磨より才六祖諱を  
惠能此下を禪宗五  
家にうつる大鑑禪師の  
から号あり  
○傳教大師の寂證も  
の日本天台の用祖あり  
延暦廿一年に入唐五十六  
歳六月四日入滅  
○役行者の役小角も  
の和忍の人葛城山に入  
て孔雀明王の法を修め  
後小母以鉢入て入唐し  
たまへ



○寒山子ゆめの人  
天台山ふ湯をく常  
に拾得と法友より後  
衣を孤衣とて文殊乃  
化身なりといふ  
○拾得豐干禪師乃  
道のこころを拾ひ得  
をるも拾得といふ  
寒山とゆはるもの終  
とちかかか  
○巨靈人の大カ神通  
を揚する人ありとて  
摩訶の力なり常に白虎  
を伴ふ





○費長房の後漢の代  
の人方を仙術とすか  
びゆく白鶴にのりて  
雲中と死ゆ一のま  
らる人なり

○琴高ハ神仙の術  
学ひて其功なり大い  
なる程に乘して水工  
狐死約し書をよま  
びびる人なりと  
す

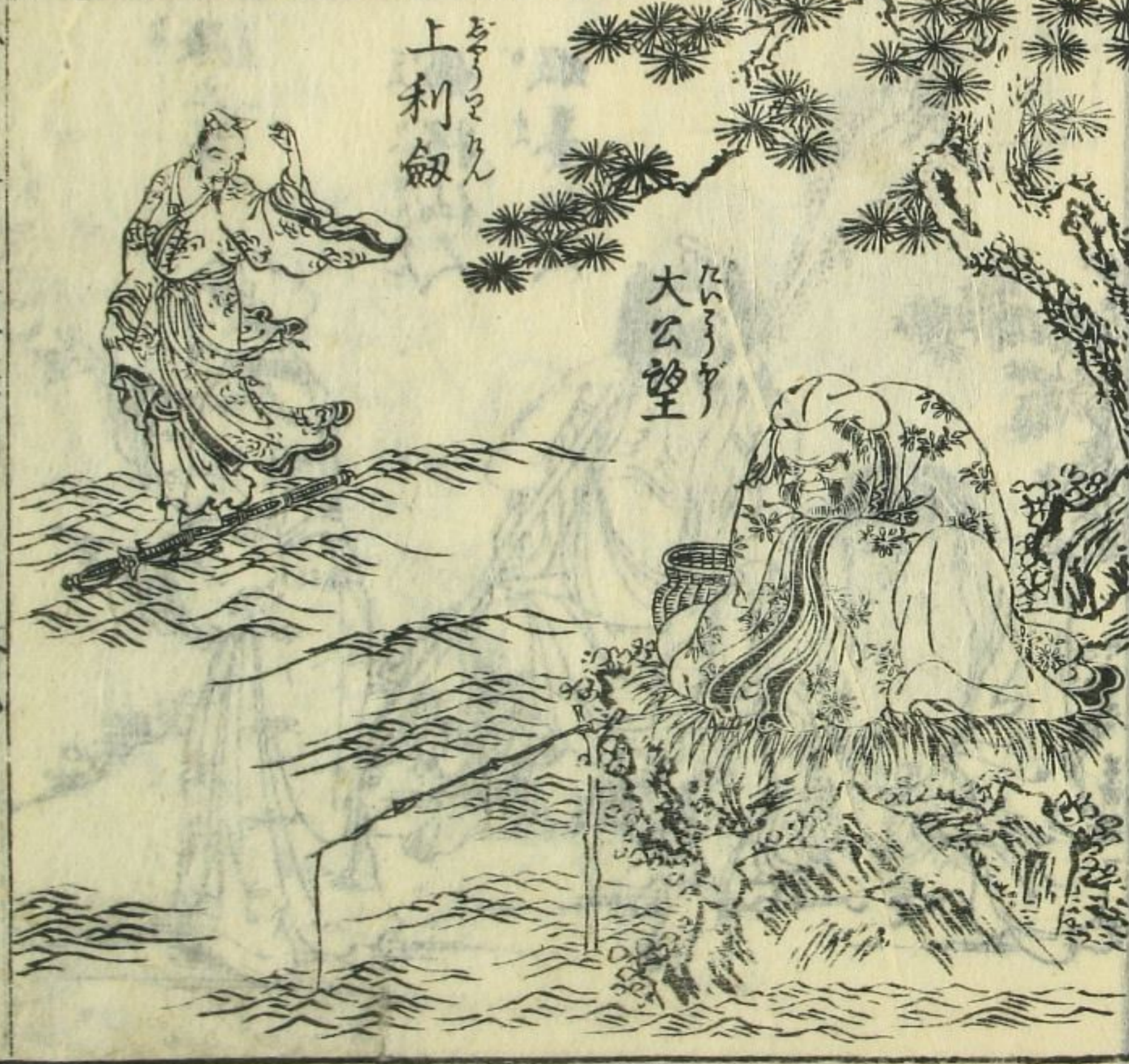


琴高

費長房

○大公望ハ尚父とも之  
を謂濱に約して樂  
そする強きなり後小  
八十余歳ふ及で周乃  
支王との賢とありあひ  
師とあひ同義王に兵  
と教也はのよ村王瓜  
亡しあふ

○上利劔ハ劔とよま  
して大海の波と死  
ゆる樹瓜ゆると  
かん



上利劔

大公望



○張九哥の宋時代は都  
 居し冬月また草の象  
 きりなり帝わやそ  
 召て酒飯ゆきわの日  
 召ふこいといふい  
 紙と様のこらにおろ  
 見とぬせふ悉たさり  
 又招らんそえの紙と  
 一しかり  
 ○鐵拐仙人の虚空に  
 ひろく己のこらを  
 ふたのこを細とゆ  
 了り入あり  
 ○瓶蓋仙人のほの  
 瓶蓋ゆきせりゆふ  
 其の多ゆきりといふ



張九哥

鐵拐仙人

瓶蓋仙人

○西王母の仙女を  
 前漢の武帝に桃を  
 ちり味甚るあり帝  
 核と植んと有る五  
 母の曰此桃三子一者  
 花咲実のつ食と  
 色いこみこの壽とま  
 つと東方朔は桃伝ら  
 ぬれと食せり  
 ○通玄の張果呂も  
 つひひこの中より物  
 と物と樹伝ゆりし  
 伝人なり



西王母

通玄



○天人の首の花曼  
 ちがひとく羽衣  
 に垢づらどほひま  
 たんせととと後  
 とも命終るとま  
 樂つてきて五妻の  
 かかしくあり  
 ○迎凌頻の天上の  
 鳥たり天人の面の  
 おくをそとて  
 英くしくく妙  
 声鳥又好音鳥と  
 もいり曼佛經の  
 歌なり



○和歌の此園の風情  
 ちて三十一字のまこと  
 祢々瓜穠うて情瓜  
 述ふと兼実とりく  
 と故に佛神も感應  
 有りの徳のいふや  
 とき和歌の神代より  
 修りていともほむえぬ  
 神とふあの内神とあふ  
 有り夜通娘人磨赤  
 人とあふの祖神ととと  
 ち後と後成定家  
 神のてたあ人教多在  
 て秀方多り



和歌の此園の風情



○詩の唐去よりかま  
て故不唐あとのま  
詩の和あにほくと  
義ありの五言七言  
五字七字に作り絶句  
と律とありよく其情  
賦述て人かを感せし  
ゆ實とあふと幸詩  
あとの二つふちあり  
白居易あご名の樂  
天晩老の存人なり  
蘇軾字子瞻東坡  
と号以宋の代れ人  
なり



○筆道の唐まの文字  
かり漢字より晋ま  
王羲之筆法の祖と  
石面小書とまの墨石  
手づりまをへしかり  
日本にては嵯峨天皇  
弘法大師拙逸成をも  
三筆といふ道風作理  
仍成と三つといふは  
も筆乃の名譽後世  
に破つて其筆乃は  
あつたりる國親王の中  
砂瓜河家一流と稱し  
て今世ふねひりる





○琴の伏羲の作り始  
あり五十絃又正々絃あり  
琴の八樂器を用を  
和琴といふ又世に流る  
十三絃の琴をほくし  
琴といふ古曲をくまひ  
多くあり

○香の清浄潔白の徳  
わる物あく様とこそあ  
故ふ神祇に依りて焼  
かむその香遠まはる  
物に水へ入てまづし  
よろく沉香といふ香云  
よろくまはる



○鞠の唐古女媧氏乃  
代に逆臣蚩尤といふ  
者謀叛と企軍に及  
しが女媧子の女帝さ  
ら聖徳のまは方民な  
びに後ひ終る虫を  
討亡し其其頭を  
孫より諸人蚩尤と悪  
まて頭と蹴り毛鞠  
の始とく鞠のころら  
松相柳橋の里かと植  
りかり飛鳥井家難波  
家鞠の家方り上が  
飛込家松下一流あり





○目利ハ雲跡古画ニ  
 万の器ハ眞價と云く  
 見分人といハ古筆を  
 ともハ付劔の目利ハ  
 本利縁とモ其家あり  
 ○算術ハ方法はいろいろ  
 貴賤ともふたつてり  
 一ハ素方り天地立運  
 乃乃乃も算教と云く  
 考ふ高ハ万里の教と知  
 る事も皆算助の術  
 とりんとと人同日用  
 算助の多減わけと  
 云々

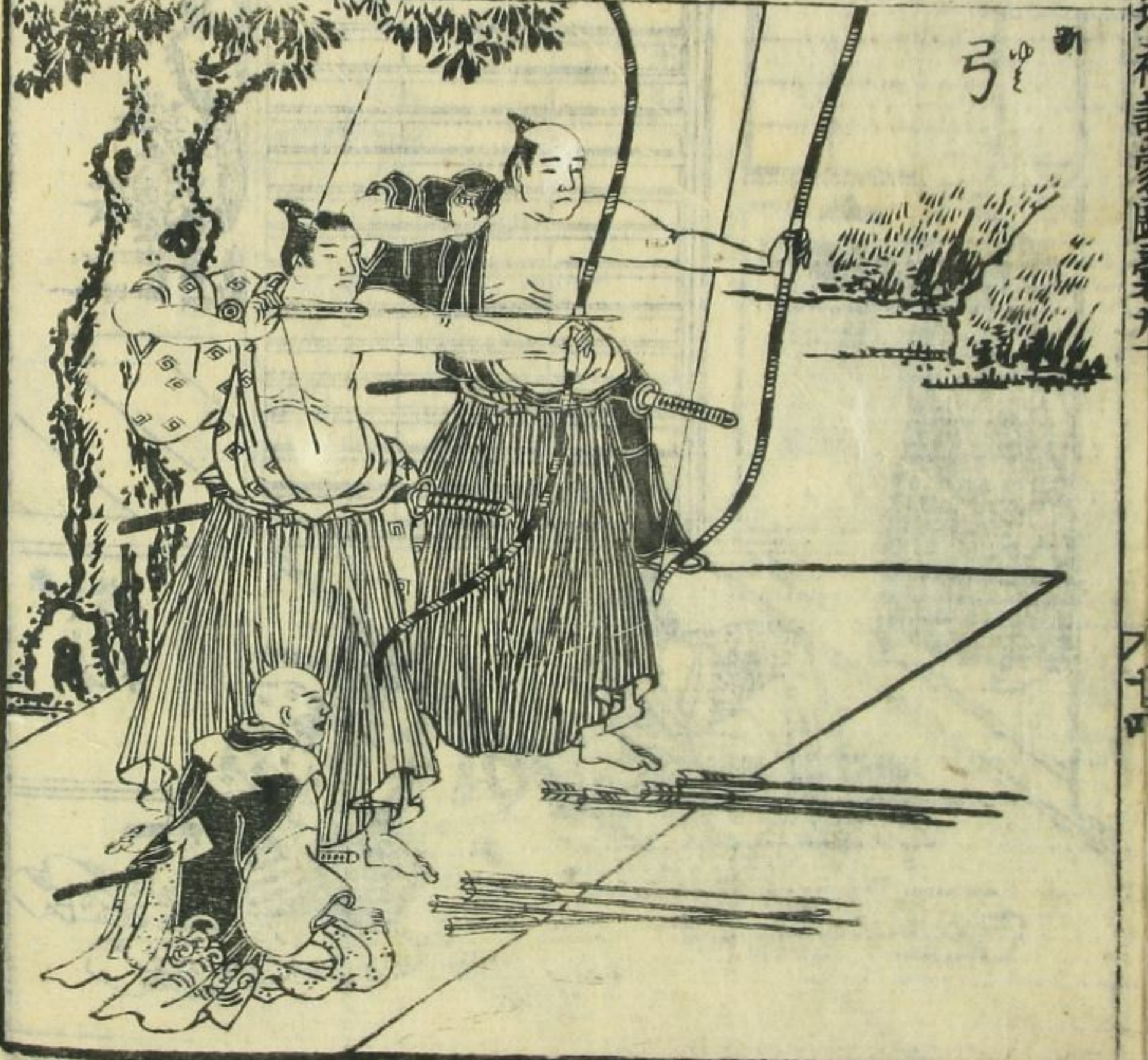


○諸礼ハ人倫のまじり  
 にかつて礼かてりか  
 ざり事なる事人乃  
 教ハ六藝といハ礼  
 樂射御書教の中  
 にも礼と重しめこの  
 國ハ礼儀の他法ハ將  
 軍義法ハの代より始  
 まりといハ小笠原家の  
 諸礼といハ又秩方とも  
 つハ仕官の人の勿論の  
 事貴人ふまじり人  
 ハあつてのかわらぬ  
 まいがをいふ事也





○弓の射藝は武  
 士の家には生々しく射  
 藝と學をいふものあり  
 らむ武士は弓矢を  
 つくり唐土に揚南  
 基とす弓の達人は百  
 歩下りて柳の多分  
 射に一藝も射せんを  
 事なりとて我朝小  
 おわく鎮西為朝能  
 壹守教経が須與市  
 等弓の達人なり其  
 外數多精兵の射て  
 わるしなり



○馬の乗馬の法を  
 是の武士の要乃多きを  
 師傳伝えて授けり  
 と所要方り切ふ  
 者ふよとて後る  
 わく曲ゆりなり  
 百曲ありとうり  
 曲の曲の曲の曲の曲  
 わく曲の曲の曲の曲の曲  
 海あり今世大將の  
 とるにりひて武士の  
 要乃とてさふの  
 たやとより大は  
 ももる後るの徳也



新馬

五



○ 劔術の右刀方乃  
 法なるを兵法とも  
 以て武士才一の乃反  
 海儀の手このり林  
 乃流折生海林新  
 海一刀海力とさるく  
 有候本舞の藝と  
 程と身の老とさる  
 ばる人師多しと  
 師き事にあつと  
 今群溢る所代り  
 かわく高家職人  
 農人等にあつと  
 七んん



新  
劔術

○ 圍碁の周公旦傳り  
 ありと云者後大呂入  
 庵の対碁事といふ三百  
 六十日の年月日教之九  
 自星の九曜の星石乃  
 黒白の昼夜と表とる  
 ありとて  
 ○ お泰の周の成帝臣  
 下王廢に命とて作  
 志し軍法の儀とて  
 事しりのあり大お泰中  
 お泰わりの今もそのと  
 お狐小お泰といふと  
 よりかゝひわりの



新  
圍碁

將碁



○茶湯のひびくこと  
 わり幸方ききも茶  
 松風教書屋と号し  
 草木の植やう料理  
 いりまして法式とま  
 らしくなりし千  
 利休よりしてはま  
 古田鐵初小堀遠及  
 と茶乃の主人其流  
 行儀とまの二助  
 元来茶乃の者とな  
 ぶに教書松風と  
 るは本まこととま



茶湯

○立花の京六南堂  
 の別當池坊立花の宗  
 匠方り毎の七月七日  
 に門才集集して立  
 る者儀は松風と  
 又拋入の侍而に師  
 わり今世かけ合ふ  
 おこふまきくおの舎  
 知一宜方のみ花  
 い人のゆかやう先  
 舞とんとんとりの  
 かきいふたきき  
 米銭のりてわと  
 ありまことりて



立花



○山伏と修験道とも  
 つま真言の法あり初と  
 修験一母をこころと云ふ  
 山伏のやりと修験  
 ありありあふ天文易  
 学はすかひて法人乃  
 五運八卦とらひるれ節  
 吉凶病の程重失物乃  
 方かく修験考ふまこ  
 一流役初者のほは修  
 せんあわんを修験考  
 の先を修験考の病を  
 初法と修験考の初と  
 初者なりといふ



○鷹の唐土五帝の時  
 ころと貴せむとくを我  
 朝ふりてりし神功  
 皇后の沛代小百派  
 國より始る修験を  
 る其後に徳天皇乃  
 沛代唐より修験  
 献せし修験と修験  
 色備名の修験と修験  
 まし修験の修験  
 りあり修験の修験  
 かんにて修験乃鳥  
 かなむ修験小貴  
 あり修験あり



新書繪巻三巻圖説卷下



○能のひびくよりあり  
 事勿きども其傳じ  
 明かしく後小松院乃  
 清亨に祝世世の存と  
 つく者公方家の能を  
 まあしくゆらん歌の流  
 に今表保生金剛とあり  
 て江戸といひり又猿楽  
 といふ事ハ猿田義の傳  
 傳のひびかりとや猿の  
 日本に傳の流一ありて  
 神祇釈教意無常故  
 事世の流すく悉集  
 ひびりのあり

能



太夫  
 同音ともいふ

地謡  
 同音ともいふ

脇

○笛小鼓大鼓を鼓  
 是とに拍子といひあり  
 笛は武常の用任仲傳る  
 とりや鼓ハ秦の猿王の  
 傳かり大鼓ハ湯ありく  
 呂あり小鼓ハ法にいと  
 律ありあま法湯和  
 合の器あり又を鼓ハ  
 黄帝の附獲と然一  
 其皮とをて作り  
 とくや或ハ云黃帝製  
 ちとてつよま女帝  
 のよえんに黃牛の鼓  
 と作りと云く



笛

小鼓

大鼓

左鼓



○ね言ねごんはそのまじり  
 けまびらうかたのふ  
 乃乃人入る事い氣分  
 物とて笑とていふを  
 産兒とあかぶ一紙と  
 日とく流義のころら  
 わりくかしのころら  
 又ね言のころらに侍授  
 せころりのありとまじ  
 ね言のまじりね言と  
 ちりて人のを瓜を  
 はらひひとあまの  
 を要とてころりのあり  
 とら



○浄苗じやうめいは小形お通  
 小娘も海川伝長公の  
 侍女まじりお通は作  
 浄苗は女が友と伝長  
 忠に侍授しとけり  
 是を浄苗とていふ  
 其後浄苗は波角の兩  
 控授三線に合せて曲  
 節とていふ。又其衣の以  
 たら浄苗は衣の更  
 といふとていふにけり  
 糸大板にた浄苗は  
 衣の更とていふにけり  
 流義出せり





○三弦の元来琉球  
 國の樂器なり  
 三味線とも書あり  
 近世諸國より小此三  
 弦とりてわらふ事  
 かりを嬉みれおん  
 とも親子にかわく自  
 由の空かりぬる者  
 月夜の樂こそ余乃  
 於其いづこ三弦とりて  
 一曲を要しとて小弓と  
 けりとの三弦とりて  
 出せりものなるべし



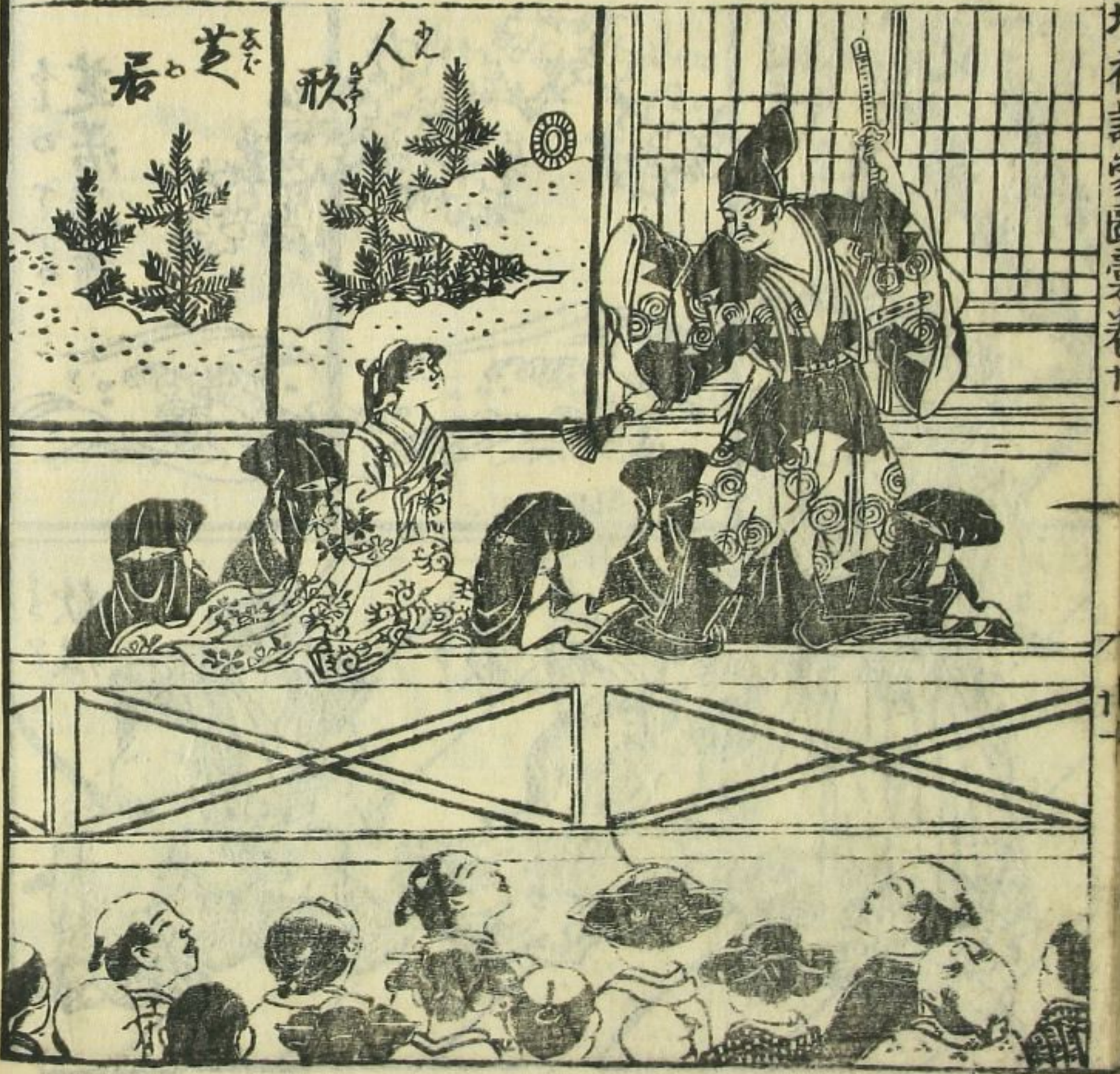
○芝居の真おもろ  
 河原の芝にこそか  
 をおもしろてねと  
 かしたるものにて今  
 影下りたるは  
 のおもしろい  
 上ふかりく  
 中にも花  
 立役女  
 ともく  
 三ヶの清  
 とゆる  
 ともかりぬ  
 とおびを



芝居の真おもろ



○人形芝居のわづら  
 ともいふものありともいふもの  
 人形紙系はくはくは  
 つらひい事ありか  
 加者おとそ今自由  
 えとてきとて事生  
 わりかてり 雅波竹中  
 豊竹の長芝居とて  
 せよのりまことありふ  
 雅波み竹田といふあり  
 人形の芝居ありは  
 ちき細工とてかして人の  
 月状といふことやとの  
 ちかり



○軽業のひうしう其  
 竹ありまきある始とて  
 ど派不危き西化あり  
 どもりの合ひ練のそと  
 ぼくよひのあまきとて  
 人の目然る病とて  
 どの人ともやまのま  
 様我が心かたとのあり  
 きつんをまといひの  
 一つつとてとてあり  
 よんを種とてとて  
 世俗ふきとてとて  
 雅の附らう仕とて  
 ちりごとのあり





○梓ねいえ祖堂也上人ありち系也堂の心に住居して茶釜をけつり他業をも十二月十三日る京町中と賣わつく正月大の茶釜をて死例として求る事あり

○麻呂の事編といふ毎年其麻呂大明神其心の吉西人の身の上五穀の苦悪等神託の瓜備國(觸)ちりりあり



○猿新のゆりたてかりし今系なり其の伏見の者なりゆりし年乃ゆりし所芳へ嘉例としてしをめでたき事と云し又田舎にて年馬と飼ふ秋入の時分きとてあはてておまひりて其ぬい猿いふ乃又と縁とあるふの子といふゆかりあひのいおとら書に又人あり





○万歳楽の年のはじめ  
 めてつた初とどうおぼへ  
 て授ひまふあひじ  
 よりも有年ありやう  
 聖徳太子の所時に為  
 帽子の表裏と下しあひ  
 一何あうて今に為  
 習子素直とまをん  
 いろり初へあるは人お  
 仰る農人ありんや  
 師と万歳といふ中  
 へ一法より出東國へ  
 三河のふらふら  
 り



夫宮室衣冠動植飛沉凡百器用以  
 文字寫貌其狀則目瞭然思已過  
 彷彿求之圖繪則一目瞭然思已過  
 半矣故古人之講學必也右書左圖  
 圖書並稱取從來尚矣惕齋先生所  
 著圖彙至意所屬蓋亦生乎此其書  
 奚翅訓導童蒙云爾雖宿儒老學亦  
 有資以廣致格之識家珍人藏良有

頁下



圖書增補詩經圖彙跋

以茲從寬文遠今殆百幾十年版已就剝缺今茲寬政已酉額田氏主人囑下河邊氏移寫舊樣再剝剝而精工緝密視舊有倍焉刻成請余以一語余謂近有春朝齋山城各所圖會亦以圖繪之故盛行乎世朝摺暮印洛陽帛貴彼實不過一卧遊之具而已矧且見賞如斯况之大有益之書非徒供於目翫也則必與彼並馳而趨乘過此如指諸掌余預為額田翁化賀翁至記而驗之

己酉四月

春莊端隆





頭書增補訓蒙圖彙跋

寬政元年己酉三月吉辰 出来

皇都書林 九皋堂 壽梓

訓蒙圖彙 大本 全八冊

同本小本 全四冊

同增補頭書 全八冊

同增補頭書大成 全十冊

寬政元年出来 河邊拾水子画圖

同增補頭書大成拾遺 全五冊 副出

三才千字文 訓蒙圖彙の目録と初巻の末  
漢字にて書き受ゆりに後抄

村上勘兵衛

出雲寺文治郎

今井七良兵衛

額田正三郎

勝村治右衛門

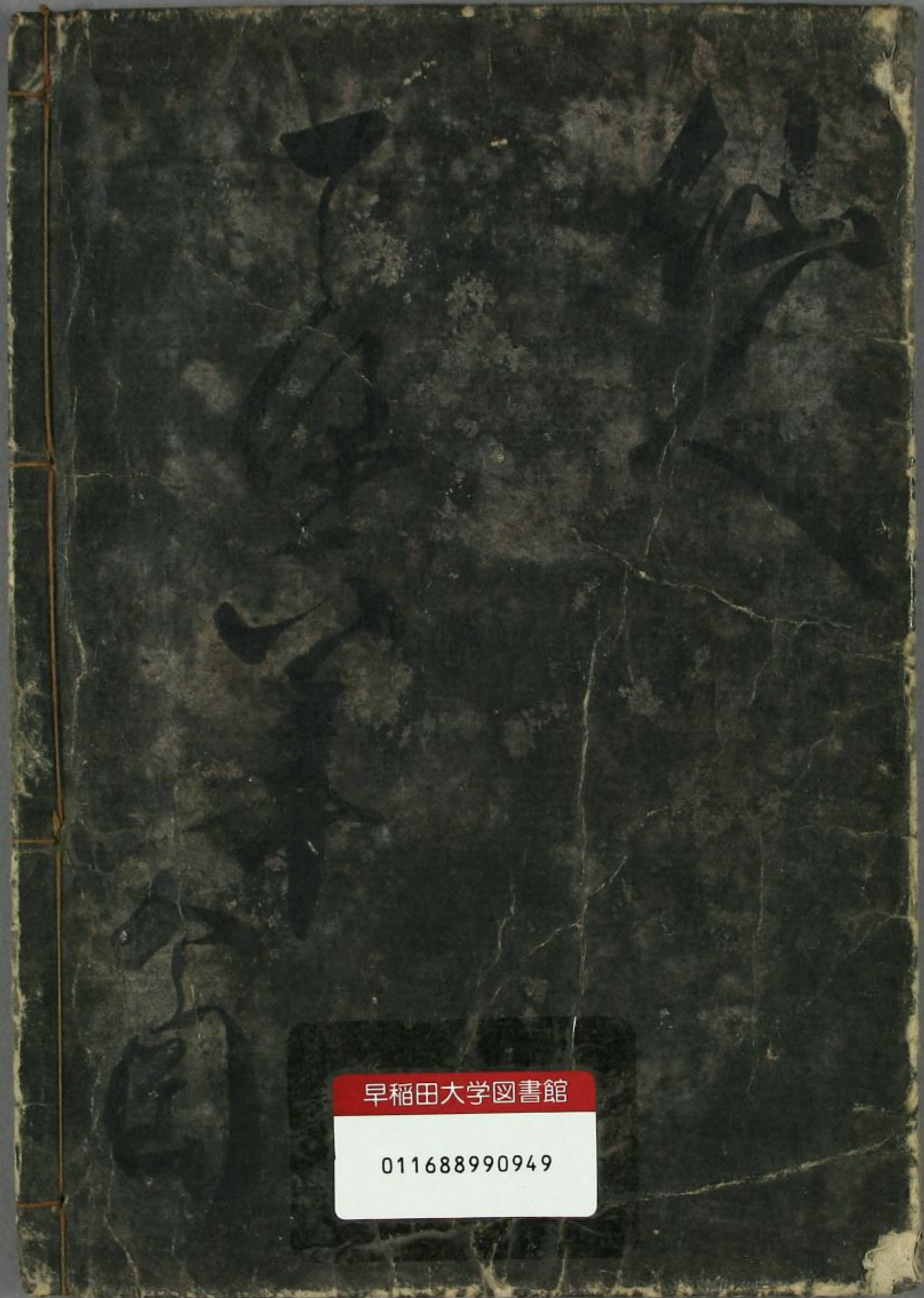
泉 右兵衛

小川 左九郎門

小川 源兵衛

谷口 勘三郎





早稲田大学図書館

011688990949